

自然誌 **だぶり** 冬

Natural history

三重自然誌の会情報誌 99号

2014年 3月

テンは山の動物？－明和町でテン

テンという動物をご存じでしょうか？変わった名前ですので由来を調べてみましたが、残念ながらわかりませんでした。登山道上に点々と残している糞の主であるからとか聞いたこともありますが、どうでしょうか。佐渡島でケージ内のトキを襲ったことで一時有名になりましたが、一般的には山地に棲んでいると思われがちで、私も平野部に分布しているとは思っていませんでした。ところが、2011年5月18日午後9時半頃に、伊勢から松阪への道中、県道37号線（旧23号線）の明和町蓑村地内の路上でイタチのような動物が死んでいるのを見つけました。私の習性で、すぐにUターンをして車を止めて近づいてみると、なんとテンの轢死体でした。はねられてからそれほど時間は経っていないようでしたので、暗くなったので道路を横切ろうとして輪禍に遭ったのでしょう。道路の両側には商業施設や工場、住宅、お寺などが建ち並び、さらに耕作地が1 km以上続いて西側にはゴルフ場や丘陵地が、東側には大仏山があります。山といっても標高53mしかありませんが、公園として管理されていますので、まとまった林が残されています。このような、平野部のなかに取り残された林にもテンが生息するということを新たに認識しました。



写真 輪禍に遭ったテン（2011年5月18日、明和町蓑村）と発見地点のようす（2014年3月10日、松阪方面から撮影）。写真ほぼ中央、左手に大仏山に続く林、右に社寺林があるあたりで発見。

〈清水善吉：松阪市日丘町 1386－17〉

干潟固有のアブ

篠 木 善 重

津市河芸町の田中川干潟からアブ科のスズキキロアブ *Atylotus suzukii* Hayakawa, 1978を、篠木ほか（2012）が標本写真を図示して三重県初記録として報告している。以下はその後日談である。

Atylotus キロアブ属の仲間は、頭の幅が胸幅よりも著しく大きいという特徴があり、県内には少なくとも4種類が生息している。うち2種類は海浜性で、6月頃の砂浜には篠木ほか（2012）が記録した *Atylotus* sp. が生息していて、その正体は依然として不明のままである。また、干潟生息のアブとして日本から記録されているのはスズキキロアブを含めて5種類だけである（鈴木，1998）。

さて、筆者がスズキキロアブを干潟で採集したのは2011年のことだが、当時は干潟に固有のアブが存在するという予備知識が全くなかったので、砂浜にいる *Atylotus* sp. が干潟まで遊びにやってきたのだらうと思い込んでいた。田中川干潟は潟湖タイプの干潟であり、芦原海岸の砂浜とは一体となっているため、何の疑問もなく思い込んでいた。*Atylotus* sp. と思い込んでいた個体は、捕獲する前に生態写真を撮っておいた（写真1）。画像ファイル名には撮影日の日付を入れておいたが、その日付が誤って別の日になっていた。いつの間にか、生態写真を撮っていたことも含めて、採集時の記憶が消えてしまった。

2012年に *Atylotus* sp. を記録するため、あらためて標本を調べ直したところ、腹背の斑紋が明瞭で、他の標本と異なるものが1個体見つかった。これがスズキキロアブであったが、採集時の記憶が消えていたので、標本写真を図示して報告した。生態写真を撮っていたことを思い出していたら、当然、生態写真で図示していたはず。当時の記憶がよみがえってきたのは、この短報を書き始めた2014年2月中旬のこと。偶然にも塩湿地植物のひとつアカザ科のハマツナに止まった本種の画像を見つけ、あらためて画像のプロパティから撮影日時を確かめると、篠木ほか（2012）が記録した2011年6月24日の午前11時55分であった。このとき、画像ファイル名に書かれていた日付はこれと異なっていることによりやく気づいた。

2013年にも本種の生態を撮影できた（写真2）。ハクセンシオマネキの巣穴のそばで見つけた。残念ながら、捕獲には失敗した。本種の体色が干潟内の土と同系色のため、ひとたび飛んで逃げて行った個体を再発見するのは難しい。



写真1 ハマツナに止まるスズキキロアブ♀
2011.6.24



写真2 ハクセンシオマネキ♀の巣穴近くで静止する
スズキキロアブ♀ 2013.7.5

松阪市にある松名瀬干潟は、田中川干潟と同じ潟湖タイプの干潟であり、その規模も大きいので本種の生息が予想される。今度は松名瀬干潟から本種を記録したいものだ。

なお、干潟や砂浜で見つかる県内のキイロアブ属はたいへん大人しく、人に襲いかかるようなことはないから非吸血性のアブなのであろう。

文献

Hayakawa H. (1981) Description of *Atylotus suzukii* n. sp. from Kyushu, Shikoku and Tsushima Islands, Japan (Diptera, Tabanidae). 衛生動物32(2): 105-110, 日本衛生動物学会.

篠木善重・大石久志 (2012) 津市の双翅目 (ハエ目). 三重自然誌, (13): 92-113, 三重自然誌の会.

鈴木博 (1998) 干潟で産卵するスズキキイロアブ *Atylotus suzukii*. 衛生動物49(supplement): 73, 日本衛生動物学会.

〈しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1〉

「じえ じえ じえ」のカタツムリ

中 優

日本の各地へ出かけた際にカタツムリを採ってきてくれる友人がいます。持ち帰られたカタツムリが私の手元に届くまでの経緯は様々で、生きている個体については冷蔵庫での保管をお願いしていますが、届くまでの期間が長い場合や採集された時期が夏期の場合は、ほとんどが死んでしまっています。ところが昨年、友人宅での長期間の保管に耐え、私の手元に生きたまま届けられたカタツムリがありましたのでその報告をします。



写真1 現在のツシマイマイ

今回、採集されたカタツムリが届けられたのは2013年10月初旬でした。2012年7月15日に採集とのデータをパソコンに入力している時、整理のためにチャック付ビニール袋から出してあった紙の上で這い回り出したのは、長崎県の対馬で採取されたツシマイマイ?の幼貝でした。一年以上も前に採集された個体なので当然死んでいるものと思い込んでいたのですが、生きていたことにとても驚きました。カタツムリは体表が粘膜で覆われているため乾燥が苦手で、雨が降らない場合は殻口に「エピフラム」と呼ばれる膜を張ったり、湿気の多い土中に潜ったりします。ただ、室内でも「エピフラム」を張れば仮眠し半年でも生きていることがあると、どの本だったか忘れてしまいましたが読んだことがあります。そして、まさに目の前でそれ以上の現象が展開されていたのでした。少なくみても1年と2ヶ月間は仮眠状態で生きていたこととなります。友人に確認したところ、自宅冷蔵庫の野菜庫に保管してあったのを忘れていたそうです。低温（私の自宅の野菜庫は4℃）とチャック付ビニール袋がカタツムリの仮眠にとって好条件であったのだと思います。

長い眠りから目覚めた反動か、動き出したツシマイマイ?に餌を与えたところ、むさぼるように食べ始め、当初1.4cmほどだった殻径が現在（2014年2月20日）では3.3cmと順調な成長を遂げており、親になる日も近いようです。ちなみに、私は冬でもヒーターを入れた箱でカタツムリを飼っています。

最後に、今回のような例はほかにも多くあってそのことを私が知らないだけかもしれませんので念のため。

〈なか まさる：伊勢市小俣町本町1284〉

事務所で観察した生きもの

清水 善吉

いきなり私事で恐縮ですが、3年前に思うところがあって早期退職をし、生活にメリハリをつけるために自宅から徒歩1分(約150m)のところにコンテナの事務所・作業場を設けました。場所は、松阪市街地の西郊に位置する日丘町という35年前に里山を造成して誕生した住宅団地の一角です。団地はできたものの一部は今なお田園地帯で、団地の一部は別荘地として売り出されたというだけあって、ため池や林も多く残されています。

さて、私の事務所は団地の端、八重田池というため池の畔にあり、四季折々の自然の移ろいをみることができます。事務所では、時々には本会会員さんが集まって会議等もしますが、通常は一人でデータ整理や書き物などの作業、まれに居眠りもしますが、いずれにしても静かなものです。また、建物が粗末なことも幸いして、いろいろな動物たちが、警戒をせず近くに寄ってきます。ここでは、過去3年間のあいだに少しずつ撮りためた写真で、事務所を訪れた生きものたちを紹介します。

まず、一番多く訪れてくれるのは野鳥たちです。室内から八重田池が見渡せますので、冬には多くのカモ類を居ながらにして観察できます。カモは、時々土手にあがって採餌していますが、人が近づくと一斉に水面に帰って行きます。この池はオオクチバスの釣り場として有名らしく、少し暖かくなってくると多くの釣り人がやってきます。池の水を落としてバス退治をしませんかと、地元や役所に以前から働きかけているのですが、まだ果たせないでいます。カップルで釣りにきた男性の方が、人がいないと思ったのか、自信があったのか、事務所の方に向けて立小便をしてくれたのには閉口しました。この土手では、ハシボソガラスやツグミ、モズなども餌探しをしています。

また、キジが付近で繁殖しているようで、側溝に落ち込んだヒナを救出したこともありました。キジの雌がしきりに車道を行き来しているので不思議に思い、外に出で側溝をのぞくとキジのヒナ5羽が側溝に落ち込んであがれなくなっていました。近くにあった板を渡しかけてスロープをつくってや



写真1 土手で草を食べるヒドリガモ、2011.3.29撮影



写真2 トノサマガエルを捕まえたハシボソガラス、2012.4.23



写真3 キジのペア(2011.9.21)と側溝内のヒナ(2011.5.9)



写真4 網戸に留まったメジロの子ども、2012.5.8



写真5 サクラの花を食べるスズメ、2012.4.17



写真6 ピンぼけですが花粉でくちばしを黄色くしたヒヨ、2012.4.2

ると3羽は自力であがって母親のもとへ戻りましたが、2羽が残ってしまいました。しばらくそのままにしておいたのですが、下校中の小学生が鳴き声を聞きつけて騒ぎ出しましたので、彼女らと一緒にタモ網ですくって、母親のいる林に放してやりました。

繁殖といえば、室内にいと網戸にいきなりメジロのヒナが留まったこともありましたが、巣立ち後数日は経ったと思われる姿をしていましたが、外に出で近づいて写真をとっても逃げることはありませんでした。また、周囲には梅や桜の木も植わっていますので、花の時期にはメジロ以外にもスズメやヒヨドリなどが花や蜜を食べに訪れ、花粉でくちばしを黄色くしたヒヨも時々みかけます。

寒さがゆるんでくると、池からカメが上陸して日光浴をするようになります。最初に姿を現すのはイシガメで、さらに暖かくなると外来種のアカミミガメを見るようになります。今のところ、イシガメの方が多くみられますが、「アカミミガメの方が強い」と言われていますので、今後の推移を観察していきたいと思います。また、マムシを事務所前の車道で、シロマダラも同じく車道で夜間にみかれていますので、ほかのへびも生息していることでしょう。

哺乳類は昼間に姿を表すことはめったにありませんが、外来種のチョウセンイタチが日中、草刈直後の土手で餌を探していました。室内からカメラをかまえると、なにかしら感じるものがあつたのか、後ろ足で立ち上がってこちらを凝視してきました。結局、そのまま採餌を続けましたが、ちなみに、キジペアは同じ状況でも、こちらにまったく気づきませんでした。

ほかに、昆虫も多くの種類が集まってきます。秋にアサギマダラが室内に入ってきたのでマークをつけて放したこともあります。また、夏の夜には灯りに引き寄せられた昆虫がてんこ盛りに来ます。また、それをねらってコウモリもたくさん飛んでいます。一度、コウモリが池に落ちたのを見ましたが、必死になって泳ぐ姿は、さながらバタフライの競泳選手のようなでした。これは、残念ながら写真には撮れませんでした。昆虫については、いずれきちんと調べてみたいと思っています。

今冬は大雪にみまわれ、私がこの地に住みだしてから30年近くなりますが、一番の積雪をみました。それでも、日差しは確実に暖かくなってきています。池のカモたちはまもなく北へ旅立ち、カメは冬眠からさめ、母キジがヒナをつれて来てくれるでしょう。



写真7 日光浴をするイシガメ，2013.4.17



写真8 池を泳ぐアカミミガメ，2012.4.23



写真9 夕方現れたマムシ，2012.10.29



写真10 深夜に現れたシロマダラ，2013.5.28



写真11 こちらを凝視するチョウセンイタチ，2011.11.5



写真12 雪の日，事務所からみた八重田池，2014.2.14

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17〉

ハタベカンガレイの三重県内新産地

市 川 正 人

菰野町永井と四日市市西村町の境（2011年11月23日）と四日市市北山町（2012年11月18日）で行った植物調査のうちに、県内におけるハタベカンガレイの生育地を新たに2ヶ所で発見した。2ヶ所ともに朝明川水系であり、前者の生育地は扇状地からの湧水を源とする農業用水路で、水深は浅いが水量は安定し、他にミズハコベが生育している。後者は朝明川から取水の農業用水路で、水田耕作時期には増水して水深は深くなる。ここにはマコモの他に水草としてオオカナダモ、コカナダモ、ホザキノフサモ、ナガエミクリなどが生育している。両生育地とも水路は三面張りで、川床に砂礫が堆積している。なお、調査の一部には山脇和也氏が同行した。

人間環境大学（愛知県岡崎市）の藤井伸二氏によれば、ハタベカンガレイは「近畿地方では湧水依存性で局所的な出現をする」とのこと。少なくとも菰野町の環境はそれに該当し、北山町も準ずるような所である。ハタベカンガレイは既に三重県レッドデータブック2005に絶滅危惧種ⅠA類（CR）として記載されている。ちなみに国レベルでは絶滅危惧Ⅱ類（VU）にランクされている。三重県RDB2005に記載されている伊賀市の個体群は小さな池に生育し、流水中のものとは環境を異にするが、池の立地から見て周囲からしみ出す湧水溜まりのようである。

菰野町の生育域の広がりについて、下流は水位が高いためか生育が見られず、流れを遡ると水路は二手に分かれ、一方は流量の少ない狭い水路で生育は確認できなかった。他方の水路は工場（大和ハウス）内の調整池からの放水で水量は多い（池の水は扇状地地下湧水が一旦溜まったものである）。この池には生育していると予想し、大和ハウスの職員お二人に案内していただいたが、生育の確認はできなかった。結果として、本種はこの生育地では限られた範囲にしか生育していないことが明らかになった。なお、発見時には個体数はかなり多く見られたが、生育地が農業用水路であるため、2013年



写真1 ハタベカンガレイの生育状況。
2013年11月4日、菰野町



写真1 ハタベカンガレイの小穂（実）。
2013年11月4日、菰野町

の観察では川床の砂礫が除去され個体数は激減していた。本種は同じような環境下の他地域でも見られる可能性は充分あるが、現時点では希少種として大切に見守っていききたい。

ハタベカンガレイは、ヒメカンガレイやカンガレイに似た種で、2004年に新分類群として記載された。生育地の環境によって形態的に多少とも種内変異が見られるようであるが、菰野町で2013年11月4日（発見時からの継続観察で初めて小穂が着いた）に採取した個体を基に形態的特徴をあげると次のようである。流水中に生育し、わずかに根茎を伸ばし、叢生し株をつくる。稈（茎）は有花茎では長さ60cm前後で3稜線形、沈水葉では扁平線形で長さ20~40±10cm、苞（苞葉）は7cm前後で基部に卵形の小さな小穂を着け、無性芽を出し、繁殖をする。小穂の鱗片は長さ4mm前後の広卵形、上部は微小鋸歯縁、瘦果は長さ2.0~2.2mm、幅1.8~2.0mmでレンズ状（柱頭2〈推定〉）、刺針状花被片は瘦果の長さとはほぼ同長の6本で下向きにざらつく。

〈いちかわ まさと：四日市市堀木1-4-5, 606〉

奈良県御所市の用水路でオオサンショウウオ

清水善吉

奈良県ではオオサンショウウオに興味を持っている方が少なく(いない)、同県内における生息状況はよくわかっていません。野外調査を一気に実施して実態を明らかにすることは、現状ではできるわけでもありませんので、地道に情報を蓄積していくしかありません。そんなことを思っていた矢先に、奈良県教育委員会の文化財担当の方からお電話をいただき、奈良県御所市で見つかったオオサンショウウオの処理に関わる機会があったので報告しておきます。

2012年8月11日、御所市戸毛の窪周二さんが、朝6時過ぎに自宅に隣接する田の見回りに行った際に水路内でオオサンショウウオがいるのを発見され、県教育委員会に連絡をしました。教育委員会から私のところに電話があり、翌日、市と県の担当者とともに現地を訪れました。

午後1時半に現地に到着し、窪さんの奥さんに昨日いた場所を案内してもらい(写真1)、水路のフタをめくるとオオサンショウウオがそこにいました(写真2)。水路は幅30cm、高さ52cmのコンクリート製、当時の水深は7~15cmでオオサンショウウオの体が辛うじて隠れる程度しかありませんでした。水温は、なんと31.7℃もあり、ほぼ気温(32.4℃)に近い状態でぬるま湯に近く、オオサンショウウオにとっては厳しかったと思われます。

水路から取り出して外部計測等を行い、各部の観察を行いました。全長113cmに対して体重13.4kgで、かなり好餌条件のもとで暮らしていたことがうかがえます(写真3)。また、後ろ足の裏側に傷が癒えたような痕と口付近に小さな生傷が認められ、右目は消失していましたが、生死にかかわるような大きなケガ等はありませんでした。さらに、総排泄口のまわりがドーナツ上に隆起しており、オスであることがわかりました(写真4)。最後に、個体識別用にマイクロチップNo.968000004600849を右肩付近に挿入しました。なお、遺伝子検査の結果は日本産と判定されています。

この水路は大和川水系の曾我川から水を引いており、取水口付近やその経路も案内していただきましたが、住宅地のなかを流れる川ですので両岸はコンクリート護岸となっており、水もやや濁っていました(写真5,6)。水路等でオオサンショウウオが見つかった場合、通常は取水口付近に放すのですが、この付近はオオサンショウウオの生息に適しているようには見えませんでしたので、橿原市昆虫館で緊急保護をしてもらうことにしました。後日、取水口付近やその上下流で昆虫館等によりトラップ調査も実施されましたが生息は確認できませんでした。

さて、ここで問題となるのは、このオオサンショウウオはどこから来たのかということです。まず、



写真1 オオサンショウウオが発見された地点のようす



写真2 水路内のオオサンショウウオ



写真3 ややメタボ気味の体型



写真4 総排泄口のふくらみと後肢の傷痕

これまでオオサンショウウオの生息情報がまったくなかった地域ですので、違法に飼育されていた個体ではないかと疑われます。ややメタボ気味の体型もそのことを示唆していますが、飼育の情報は得られていません。一方、後ろ足の傷痕や性徴が現れているこ



写真5 曾我川の取水堰付近の様子



写真6 オオサンショウウオが通ったと思われる水路

とは野外で生活していたことを示唆します。つまり、河川で堰等を遡上する際に足の裏に肉がえぐれてしまうことが多く、その痕跡とも考えられますし、水温変化の少ない飼育下では性徴は現れないことが多いからです。しかしながらいずれも決め手に欠け、川に戻すわけにもいかないため、このオオサンショウウオは現在も昆虫館で飼育展示されています。

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17〉

事務局から

○鈴鹿青少年の森湿地整備作業を実施

1月20日の午後、鈴鹿青少年の森にある湿地の草刈作業を行いました。今回は、県鈴鹿建設部や教育委員会、公園の指定管理者、県民の森(菰野町)スタッフの方々にも参加していただき、会員5名とあわせて総勢17人で作業を行いました。このたよりが皆さんのお手元に届く頃にはハルリンドウが咲いているはずですので、一度のぞいてみてください。作業に参加された皆さん、お疲れ様でした。

○自然誌だよりを製本します

本誌も次号で100号になりますので、保管している残部(欠号分はコピー)を1～50号、51～100号の2分冊に簡易製本して各3千円(セット5千円)で販売したいと思います。残部に限りがありますので会員さんには優先的に販売します。購入希望の方がみえましたらご連絡下さい。

○会報の原稿募集

会報「自然誌だより春号」は6月発行予定です。観察記録や会への意見・要望、自然保護活動などについて、ふるってご投稿ください。

○2014年会費未納の方は至急お振り込み下さい。退会される方はご一報を!!



参加の面々と休憩時に行った学習会の様子

編集後記

原稿集めに四苦八苦しながらも次号で100号です。年4回発行で足かけ25年、よく続いたと思います(善)。

自然誌だより99号

発行日 2014年3月25日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp